

令和2年度 学生による地域活性化プログラム

石川英樹ゼミナール 活動報告書

栃尾地域のPRによる活性化: フォトコンテスト開催による栃尾地区のPR



04

令和2年度

ごあいさつ



長岡大学 学長 村山 光博

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」は、3、4年次の専門ゼミナールに所属する学生グループが、地域の課題解決や魅力創出に向けた調査研究と具体的な取り組みを行うことにより、学生の職業人としての基礎的能力の向上と地域活性化への貢献を目指すプログラムです。本プログラムは、平成19（2007）年度の導入から現在まで十数年に渡り継続し、発展してきた本学の特徴的な教育プログラムの一つであるとも言えます。最近では、取り組みの中心である学生の諸活動を新聞やテレビ、ラジオ等のメディアでも取り上げていただく機会も多くなりました。また、これまで本プログラムの運営に多大なご協力をいただいた地域連携アドバイザーをはじめ地域の多くの皆様から、各取り組みテーマへのお問い合わせや激励のお言葉をいただいております。長きにわたりこの取り組みを続けて来られたのは、ひとえに地域の皆様の暖かいご支援とご指導の賜物と、心より感謝申し上げます。

「地域活性化とは何か」という問いに対する明確な答えを述べることは難しいと思いますが、本プログラムでは、答えの無い様々な地域課題に対して、それらの課題の原因をどのように捉え、どのように行動を起こして対応して行くのかを学生が自ら体得することができます。本学を卒業後に地域社会の一員となる学生が、将来このような地域課題に対して日々取り組むことになると考えると、これらの体験は彼らにとって大変貴重なものとなることでしょう。

本プログラムでは、各ゼミナールで設定したテーマの下で学生グループが活動を進めて行くこととなりますが、時には学生同士のちょっとしたすれ違いや一緒に活動する地域の大人たちとの意見の食い違い等が起きることもあります。このような体験も学生がさらに一歩、人として成長するためのきっかけとなります。ゼミで決めたテーマをまとめ上げるために、どのように他者とかわりながら取り組みを進めて行くべきなのか、この取り組みの中で自分の役割は何であるのか、などを考えながら活動を行っていくことで、チームで活動することの難しさだけでなく、チームで目標に向かって何かをやり遂げることの充実感や達成感を味わうことができます。

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」では、学生が地域に飛び込んで地域の皆様と一緒に汗をかき、考え、そして楽しむ中から、目先の地域貢献活動だけでなく、将来にわたって地域の活性化を担っていく事のできる人材の育成を目指しております。本学の建学の精神は、「幅広い職業人としての人づくりと実学実践教育の推進」と「地域社会に貢献し得る人材の育成」です。本プログラムは、まさにこの精神を実現するための中核となる教育プログラムであると言えます。

令和3年3月



長岡大学は、文部科学大臣の認証を受けた『公益財団法人日本高等教育評価機構』により、平成28年度大学機関別認証評価を受審し、平成29年3月7日、日本高等教育評価機構が定める大学評価基準を満たしていると「認定」されました。

はじめに

栃尾地域のPRによる活性化 フォトコンテスト開催による栃尾地区のPR



長岡大学教授／ゼミ担当教員 石川 英樹

令和2(2020)年度の本ゼミナールでは、3班に分かれそれぞれの課題に取り組むことにした。昨年度以来、ゼミ全体として栃尾地域の活性化が目標であるが、三班それぞれが各論としての取組課題を設定した。

その中で、本報告書をまとめた「ツアー開発班」は昨年度に立ち上げられたグループである。栃尾の観光資源をもとにした日帰りツアーを開発して域外の人々に参加してもらって、交流人口の増加へ貢献することを目指していた。今年度は新たに新3年生4名が加わり、さらに4年生4名の編成も昨年度とは変わり、新たなメンバー8名でツアー開発2年目の事業が開始された。

しかし今年度は、新型コロナウイルス感染症によりツアー開発が現実的ではなくなった。そうして、実際のツアー開発は次年度以降の新型コロナウイルスが収束した後に取り組むことにして、今年度はツアー以外の形で栃尾の観光資源を域内外にPRする取組を目指した。その具体的なプロジェクトが「栃尾市街地フォトコンテスト2020」である。

フォトコンテストの実施が最終決定されたのは8月中旬だった。まず問題となったのはプロジェクト全体のスケジュールリングである。12月上旬の成果報告会で全てを発表できるよう、フォトコン参加者募集のPR活動、応募作品の受付と管理、審査とその結果公表、さらに作品展の開催まで、一連の全プロセスをそれまでに完結しようと考えたのである。そこから逆算し、10月15日の作品応募受付開始を目標として、準備を進めることにした。つまり、およそ2ヶ月足らずの間に、作品応募要領等の詳細決定、PR特設ウェブサイトとInstagramの開設、チラシ作成と、PRの施設訪問、賞金のための協賛金を募る活動など、相当の作業をこなさねばならない状況になった。

それらの詳細についてはゼミ生による報告書本文の解説に譲るが、この班のメンバーが取り組んだ作業量は、本年度の3つの班の中で最も多かったであろう。本原稿執筆時の2月時点においても応募作品展覧会をギャラリーで開催中と、まだ活動が続いている。

さらには、ご協力いただいた地域の方々的人数も、本班は最も多かった。4回の栃尾高校との共同授業、協賛金のお願活動、チラシとポスターの配布活動、協賛した「とちおにぎわい委員会」の方々等との打合せなど、多くの交流機会を通じて地域の方々のお世話になった。それだけ、ゼミ生が栃尾地域の皆様にご指導いただけたのである。

また、コロナ渦においても、この班は栃尾高校との協働へ大いに取り組んでくれた。そのお陰で、昨年度から始まった本ゼミでの高大連携による地域活性化を何とか継続できた。班のメンバーは、より若い世代とプロジェクトを進めるといふ貴重な経験を積むことができた。さらに本学としても、長岡地域における高大接続PBLのパイロット事業として教育充実に向けた経験を積むことができたと考えている。

令和3年3月

石川英樹
ゼミナール
(ツアー班)

栃尾地域のPRによる活性化 ～フォトコンテスト開催による栃尾地区のPR～

【参加学生】 7名(4年生4名, 3年生3名)

【アドバイザー】

4年生 野澤幸紀、大野 航、布川海渡、胡 少峰、 デザイン事務所オオタケコウスケ 大竹幸輔 氏

3年生 阿部紘輝、王 浩田、小林真由香、松永優芽

目標： 栃尾をPRして、来年度以降のツアー開発につなぐ 「栃尾市街地フォトコンテスト」開催プロジェクト

- ◇地域外の人に撮影しに栃尾に来てもらい、栃尾の魅力を伝える
- ◇地域外の人々の新鮮な視点で、栃尾の魅力の新発見

《取組①》自分たち自身が栃尾を知る

メンバー全員で栃尾視察 (2020/7月) ……………



《取組②》地域の方々との協働

とちおにぎわい委員会、栃尾商工会、栃尾支所等とヒアリング、フォトコン詳細打ち合わせ



栃尾商工会で打合せ (2020年8月)



栃尾支所訪問 (2020年8月)

《取組③》フォトコンPRの準備

- ・特設ウェブサイト・Instagram 開設、
- ・チラシ作成

(作成したチラシ)



《取組④》協賛金のお願いで商店街・企業まわり

フォトコンの入賞作への賞金のために協賛金お願いの活動。賞金総額 10万円目標。⇒ 地域の皆様のご協力で目標達成

《取組⑤》栃尾高校との共同授業(計4回)

フォトコン実施要領を詰める相談。フォトコン PR のためのポスターと参加者特典グッズ制作を依頼。高校生向けの PR 活動も依頼

(共同授業の様子)



《取組⑥》フォトコンPRのための外回りなど

チラシ、ポスターをもって商業施設、公的施設にPRの依頼。特設ウェブ・Instagramの投稿でフォトコンへの参加の働きかけ

《取組⑦》応募写真受付、審査の体制整備

Eメール、郵送で受け付けた応募作品の管理、印刷、ハレパネ貼り作業の態勢確認。有識者等への審査員依頼。審査方式の整備。

フォトコン開催(2020/10/15～11/16):

応募作品：一般部門 106点、高校生以下部門 17点 / 入賞作品：一般の部 14点、高校生以下部門 12点

* 高校生以下の部門が特に少なかった……PR不足を反省

⇒ 全応募作品の展示会を開催〔ギャラリー白昼堂で2021/2/13～21〕

フォトコンテスト開催による栃尾地区のPR

石川ゼミナールⅢ・Ⅳ ツアー開発班

<メンバー>

- 17K091 野澤 幸紀 (リーダー)
- 17K027 大野 航 (副リーダー)
- 17K089 布川 海渡
- 17K308 胡 少峰
- 18K005 阿部 紘輝
- 18K019 王 浩田
- 18K043 小林 真由香
- 18K100 松永 優芽

令和3 (2021) 年2月

目 次

1. 石川ゼミツアー班の紹介	1
2. ツアー班での大まかな取り組みについて	1
3. 取り組みの詳細	2
3.1 ZOOM 授業からフォトコンテスト事業の決定まで	2
3.2 フォトコンテストの概要の詰め	10
3.3 最終打ち合わせと協賛の依頼活動の本格化	18
3.4 応募作品の受付からフォトコンテスト結果発表まで	24
4. 今年度の取り組みについての反省点、来年度以降に向けて	30
4.1 今年度の成果と反省	30
4.2 来年度の活動にむけて	32
《参考資料》	35

1. 石川ゼミツアー班の紹介

今年度の石川ゼミのツアー開発班は、4年生4名、3年生4名の計8名で活動した。昨年度は、現4年生だけの構成であったが、新たに3年生のメンバーを加えた。さらに、今年度も前年度に続いて、栃尾高校の生徒の皆さんと高大連携の活動を存続することができた。

この班の取り組みは、前年度からの続きで、栃尾地域の活性化に寄与するような日帰りバスツアーの計画づくりを進める予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により三密回避のためにバスツアーの開催は難しいと考えられた。そこで、来年度以降の活動の土台作りとして、地域のPR活動に専念することに決定し、具体的にはフォトコンテストの開催に取り組むことになった。

大学の講義は、5月のゴールデンウィーク明けからZOOMを利用したオンラインでスタートしたが、慣れない環境から話し合いがなかなか進まず、思ったような活動ができなかった。

7月以降によりやく規制が緩和され、対面での授業やフィールドワークを行うことができるようになった。この頃から、前年度に引き続き、栃尾高校とZOOMで意見交換を行った。また、アドバイザー大竹様の指導のもとで、フォトコンテストの企画を詰めていった。地域の方々との連携として、栃尾商工会、栃尾支所にヒアリングを行った。9～10月には栃尾高校での共同授業を計4回行い、話し合いを進めることもできた。

フォトコンテストという活動内容を確定してから、応募締切と審査集計まで5か月程度と短期間での活動となり、しかもフォトコンテスト実施のノウハウもなかったため、なかなかスムーズに進まなかった。さらに、大学近くの長岡市出身のメンバーも少なかったため、時間外での活動が難しく、予定通りにいかないことが多かった。そうした中でも、地域の方々、高校生の皆さんのご協力によって、何とか最後まで活動を行うことができた。

以下では、そうした本年度の取り組みについて詳しく報告する。

2. ツアー班での大まかな取り組みについて

私たち石川ゼミのツアー班が取り組んだ今年度の活動を大まかにまとめたものを〔図表1〕に記した。

〔図表1〕2020年度の石川ゼミツアー班での活動（12月のフォトコンテスト結果発表まで）

活動時期	活動内容
① 5～6月	・ ZOOM を利用したオンライン授業での話し合い。今年度のツアーの方向性、PR 活動のアイデア出し等。
② 7月	・ 対面授業開始。アドバイザー大竹様を交え PR 事業に取組決定。 ・ 今年度初の栃尾地域でのフィールドワーク実施。 ・ 栃尾高校生と共同の ZOOM 授業。
③ 8月	・ 栃尾商工会、栃尾支所へヒアリング。 ・ アドバイザー大竹様事務所にて、フォトコンテストの概要、告知方法、今後の予定について話し合い。
④ 9月	・ 栃尾商工会にてとちおにぎわい委員会の会合に参加。 ・ 栃尾高校との共同授業（4回）（フォトコンテスト概要について話し合い）。 ・ フォトコンテスト用特設ホームページ、Instagram 開設。
⑤ 10月	・ フォトコンテスト PR 用のチラシの最終チェック、チラシ完成。 ・ 新潟日報様による取材。 ・ 長岡市内各種施設にチラシの配布による広報活動。 ・ 15日から写真応募開始。 ・ 賞金用資金のため協賛依頼活動（11月末まで）。 ・ 各審査員への審査のお願い。
⑥ 11月	・ 応募作品を PC にデータ取り込み、ハレパネへ貼り付け、審査用ホームページへのアップロード。 ・ 16日に応募受付終了。 ・ オンラインでの審査、集計。
⑦ 12月	・ にぎわい委員会の広野様にお越しいただき、学内で審査。 ・ フォトコンテスト結果告知。（ホームページ、Instagram、メール告知）

（執筆担当）野澤 幸紀

3. 取り組みの詳細

3.1 ZOOM 授業からフォトコンテスト事業の決定まで

3.1.1 ZOOM を利用したオンライン授業

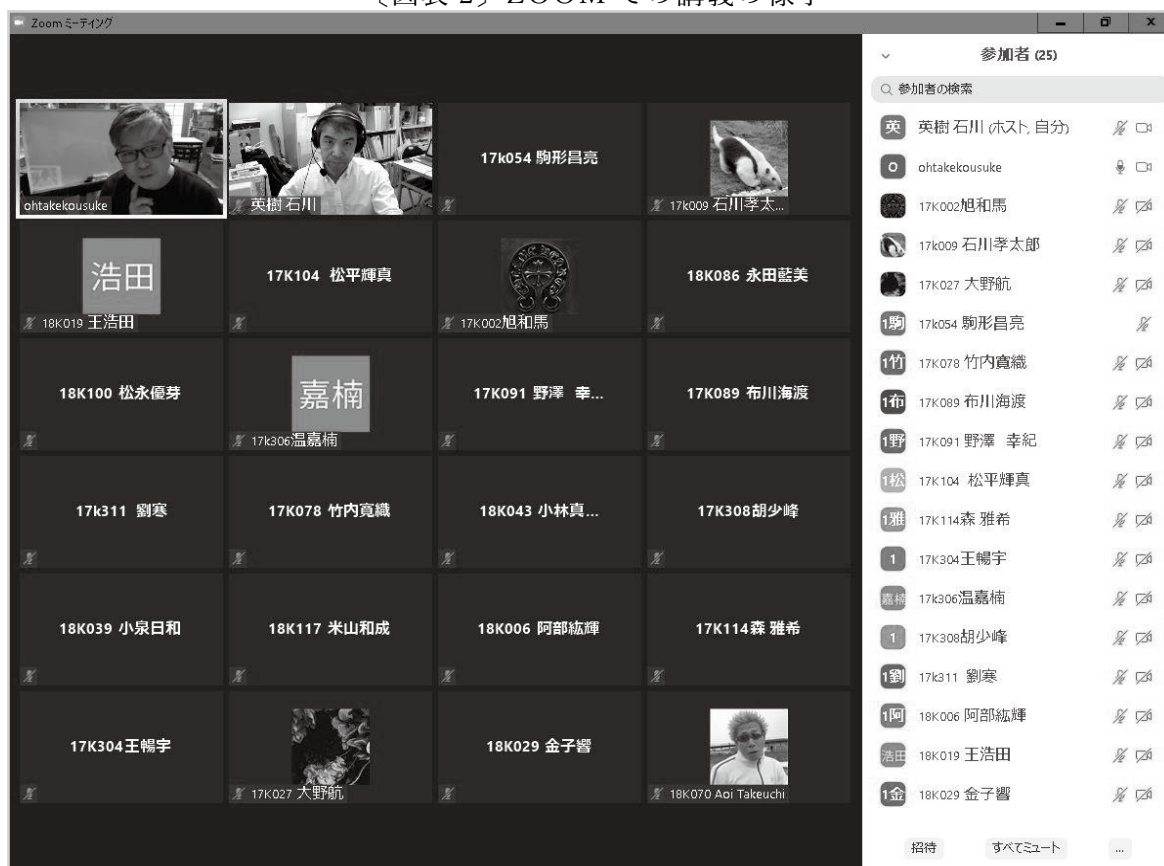
私たちは、当初、昨年度からの継続で実際のツアー開発に向けた活動を行おうと考えていた。その目標に向けて、新たに3年生のメンバーを加え、さらに昨年度同様に栃尾高校の皆さんと共同授業を実施する予定で始動した。

しかし、コロナ感染症の影響で4月中は学校閉鎖になってしまい、講義開始がゴールデンウィーク明けからになり、遅れた講義開始となった。それでも、開始まで何もしないわけにはいかないと考え、大学閉鎖の期間中にゼミメンバーには、以下の3つの課題について検討しておいてもらうことにした。

- ①今年どんなツアー開発を目指していくか
- ②イベント参加型のツアーにするならばどんなイベントが良いか
- ③栃尾の魅力を伝える場所として、どんなところがあるか

5月12日には、ようやく ZOOM を利用したオンライン授業として第一回目の講義が始まった。各メンバーが事前に考えてきたアイデアをもとに、さっそく授業内で上記①～③の事前課題についての話し合いを始めた。

〔図表2〕 ZOOM での講義の様子



「課題①：今年どんなツアー開発を目指していくか」については、以下の意見が出た。その中では、感染症の影響を考えると、狭いバスでのツアーを行うことはやはり難しいと判断していた人たちが多かった。そうした中でも、コロナ禍ならではのオンラインでのバーチャルツアーのような真新しい意見が出ていたのには驚いた。

- ・もう一度栃尾に来たいと思ってもらえるようなツアー。
- ・コロナ禍でも営業している施設を利用するツアー。
- ・昨年度と同様に自然体験型や酒蔵見学ツアーを目標にする。
- ・外部（旅行会社や広告企業）と連携したい（去年は JTB 様とのコラボがあった）。
- ・コロナ禍を考慮し、イベント関連のツアーを組むのは難しいのでやめたほうが良い。
- ・人数を限定し1回だけでなく段階的なツアー構成を考える。
- ・試験的なツアーを行い、本格的な商品化は来年度に検討する。

- ・オンラインでの模擬ツアーを行う

「課題②：イベント参加型のツアーにするならばどんなイベントが良いか」と「課題③：栃尾の魅力を伝える場所にはどんなところが良いか」については、以下の意見が出た。その中で、酒蔵見学や、自然体験型ツアーなどの案は昨年度もあったが、具体的な施設名や、体験内容まで調べた上での提案だった。昨年度にはなかったマラソンや、婚活イベント、ファミリーをターゲットにしたキャンプなどの新たなアイデアも出てきた。また、これらを単独ではなく複数のイベントの組み合わせ（例えば温泉ツアーと自然体験型ツアー）により、多数のターゲットを呼び込むことを狙う意見も出ていた。

- ・栃尾の歴史（文化・自然・寺院等）を巡るマラソン
- ・温泉ツアー（おいらこの湯）
- ・あぶらあげの食べ比べイベント
- ・去年参加したカントリーフェスティバルと絡めたイベント
- ・自然体験型ツアー（キャンプ、釣り、野菜取り、BBQ、カヌー体験など）
- ・酒造見学（諸橋酒造など）
- ・婚活イベントや人数を限定したキャンプ
- ・秋葉神社（7月の秋葉祭り）に絡んだツアー

以上のアイデアをもとにして、実際にどのようなツアーか具体的に考えることにした。その結果、以下の4つの企画案がまとまった。

(1)酒蔵見学

見学ツアーだが試飲も可能とする。酒蔵見学をメインとして、お酒に合う特産物、おつまみなどを組み合わせる。お酒を取り扱うため、参加者の年齢制限が必要である。ターゲット層は高齢者の方、お酒が好きな若者に絞ることになる。

(2)自然体験型ツアー

道院高原を利用した BBQ、キャンプ、カヌー体験の宿泊イベント、登山型のツアー、フィッシングパークを利用した釣り、栃尾スキー場でのスキー体験などである。複数を組み合わせるとツアー構成が幅広くアレンジできる。ターゲットは、子供、ファミリー層向けを中心に考える。

(3)油揚げの食べ比べイベント

道の駅「R290 とちお」での開催を想定する。様々な油揚げ業者に出店してもらい、試食会でどの店の油揚げかを当てるイベント等を実施する。原価をそれほどかけずに開催できる可能性があり、コストパフォーマンスはかなり良いとの声もあった。

(4)栃尾の歴史を巡るマラソン

栃尾の魅力が伝わるコースで実施する。交通規制をかける必要から行政の協力が必要である。スタッフもゼミメンバーだけでは足りないので、多くの人に協力をしてもらわなければならない。ターゲットは老若男女問わずマラソンが好きな方である。

(5)温泉ツアー

「おいらこの湯」を組み込んだイベントである。温泉だけではなく、自然体験型や酒蔵見学ツアーも組み込んでアレンジし、それらの行程後に疲れを温泉で癒すメニューを考える。温泉の成分や効能を調査して、それを踏まえた PR を考えると良いなどのアイデアが出された。

私たちは、上記の企画案にそれまでのディスカッションで出てきていた意見なども含めて、アドバイザー大竹幸輔様からアドバイスをいただくことにした。大竹様は、各アイデアに対して課題や改善点などを指摘して下さった。そのポイントは以下のとおりである。

- ・道院高原キャンプ場、フィッシングパーク、おいらこの湯などの商業施設は、コロナ禍で軒並み営業を中止している。これらを含めたイベントツアーは不可能に近い。
- ・三密が起こる狭いバスを利用したツアーは今年はやめたほうが良いだろう。
- ・冬のスキー体験型のツアーは、その頃までにコロナが落ち着いている可能性もあり、実施できるかもしれない。
- ・必ずしも人を呼び込むことだけがツアーだとは限らない。ショートムービーを撮影したようなバーチャルツアーの意見は非常に良いと思う。

この頃までには新型コロナウイルス感染症の問題がますます深刻化してきており、それを踏まえると、バスなどを使ったツアー開発は絶望的になってきていた。いただいたアドバイスも踏まえて、あらためて企画案を絞ることにした。その結果、①オンラインによる擬似ツアー開発、②来年度以降のツアー開発に向けた準備としてのプロモーション的な活動、という二つの方向性に絞られた。

メンバー全員で引き続きこの2案を話し合った。①のオンライン擬似ツアーの開発については、新型コロナウイルス感染症がいつ収束するかわからない状況下であって、収束までに開発が間に合わなければ需要のないツアーになる可能性があるという指摘が出た。加えて、そもそも現在のように学外でのゼミ活動が規制されている状態では、開発もままならないのではないかと、という指摘もあった。

②のプロモーション事業に関しては、肯定的な意見が多く出た。今年度は栃尾の魅力を発信していくことに注力すれば、ツアー開発の土台づくりにつながるのではないかとという意見である。来年度にはコロナ収束でツアーが実施できる可能性が高く、今年の成果が活用できるだろうという見方もあった。

最終的には、班内で満場一致により今年度のツアー開発を断念することとし、②のプロモーション事業の方向で考えることに決定した。

これでテーマの方向性が決まったが、その中で具体的な取り組みを考えなければならない。その検討に取り組み始めたところで、アドバイザー大竹様からは、取り組みイメージの土台づくりのために、一度メンバー全員で栃尾の視察を行ったほうが良いというアドバイスをいただいた。3年生には栃尾に行ったことがないメンバーもいた。自分たちの目を通して、栃尾にはどんな魅力があるのか、どんなことをすれば栃尾を楽しむことができるか、その感覚を現場から把握することが重要である。私たちは、フィールドワークの規制が緩和された7月に全員で現地視察を行うことにした。

3.1.2 ZOOM 授業の振り返り～オンライン授業での議論の難しさ

以上のとおり、5月にオンライン形式により授業が開始され、6月中旬まで ZOOM 授業が続いた。話し合いの進行、アイデア出しなどが、全くスムーズに行かなかった。顔の见えない状態での話し合いなので、いつ喋り出して良いかもわからず、誰かに振られないと喋るのが難しい。そうしたことで、リーダーとサブリーダーのワンマン・トークになってしまう状況が非常に多くなり、とてもやりにくかった。

さらに、授業時間中は班別の話し合いに入る前に、ゼミ全体での指示や情報共有の時間があるため、各班に分かれたワーク時間は毎回 30 分程度しか取れなかった。前回の課題確認と次の講義までのアイデア出しの課題確認などをするだけで時間切れになり、満足のいく話し合いはほとんどできなかった。オンライン上でのゼミのワークが非常にやりづらいと感じた約 2 ヶ月弱だった。

(執筆担当) 王 浩田

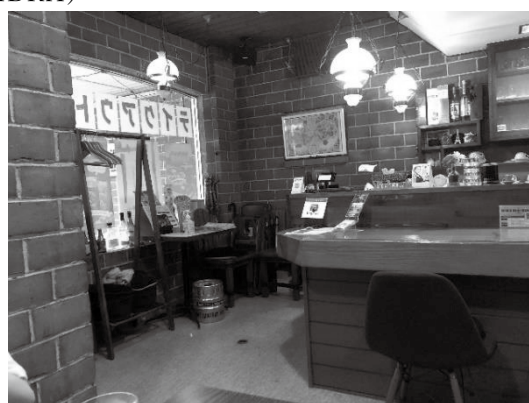
3.1.3 フィールドワークの実施

今年度初のフィールドワークは、7月11日のメンバー全員による栃尾地域の視察だった。その目的は、実際に現地で活動内容決定のヒントを得ることだった。

「グルメ&ドライブ班」と「自然班」の2グループに分かれ、各グループで具体的な視察スポット決めて出かけた。残念なことに、当日は途中から大雨に見舞われてしまい、視察に行ったスポットの撮影が難しかった。また、計画していたいくつかのスポットは行けないで終わった。

「グルメ&ドライブ班」のフィールドワークでは、CAFE & BAR LIBRA、刈谷田ダム、杜々の森に行き、「自然班」のフィールドワークでは秋葉神社、秋葉公園、道院高原に行った。自然班は、当初栃尾城跡にも行く予定だったが、大雨により断念した。

〔図表 3〕 グルメ&ドライブ班の現地で撮った写真
(Cafe & BAR LIBRA)



〔図表 4〕 グルメ&ドライブ班の現地の写真（続き）

（杜々の森）



（刈谷田ダム）



〔図表 5〕 自然班の現地の写真

（道院高原）



（道院高原のパネル）



（秋葉神社）



3.1.4. フォトコンテスト開催を決定

上述のとおり今年度は来年度以降に実施するツアー開発に向けた土台作りとして、栃尾地区のプロモーションにつながる事業を行うことになった。さらに、全員でのフィールドワークも行い、詳細の絞り込みを始めた。

プロモーション活動として何に取り組むか、そのアイデアとしてゼミ生からは以下のアイデアが出た。

- ・栃尾地区のスポットを撮影したショートムービーを作成し、市役所や道の駅などの人目につく場所で流してもらう。
- ・フィールドワークや今後の活動で撮影した写真をアルバム化し、フォトアルバムを作成する。それらを市役所や道の駅などの人目につく場所に置く。
- ・栃尾の各名所を紹介するチラシ、パンフレット、リーフレットなどを作成し、市役所や地域のお店などに配る。
- ・タイムラプス（数秒・数分に1コマずつ画像撮影したものをつないで再生しコマ送り動画のように見せる撮影方法）を用いて長時間撮影や春夏秋冬をテーマとした撮影を行い、ウェブサイトなどで公開する。
- ・栃尾をPRするホームページを作成する。
- ・SNSを活用したフォトコンテストを開催する。

その後、栃尾高校との共同授業がZOOMで実施できることになった。以上のアイデアを整理して、栃尾高校生のみなさんに、どのような取り組みが良いと思うかアンケートをお願いした。その結果、以下の意見を頂いた。

- ・地域外の人に来ていただけるように見栄えの良いムービーを作る。
- ・栃尾の山やまちの景色を撮影して紹介する。
- ・栃尾地区のおすすめのフォトスポットを紹介する。

また、高校生の意見の中には、昨年同様に何とかイベント型のツアーを実施したいという意見もあった。そこには以下のイベントが含まれていた。

- ・栃尾名物「大食い大会」の開催。
- ・スポーツイベントの開催。
- ・マルシェの開催。

いただいた意見を踏まえて話し合いを続けた中で、私たちは高校生のみなさんに、今年度は感染症の影響からツアーの実施が難しい旨をお伝えした上で、栃尾のプロモーション活動に取り組むので一緒にその活動を進めていくことをお願いした。

そうして、何とか地域外の人が栃尾に来て栃尾の良さに触れてもらうきっかけ作りにつながるPR活動、さらに今年度の取り組みが来年度以降にも活用できるようなPR活動、という視点から、取り組むべき活動の絞り込みについてゼミ内で話し合いを続けた。

その結果、「栃尾地域を対象としたフォトコンテスト」に決めた。写真撮影のための来訪を通じて直接栃尾の PR になるとともに、今年度応募されてきた写真が来年度以降に観光事業などに活用できるのではないかと考えたのである。

3.1.5 フォトコンテストを行うにあたって

フォトコンテスト開催を決定した後、その準備のためにこれから何をすべきかを話し合った。この頃、アドバイザーの大竹様から連絡いただき、フォトコンテスト事業が「とちおにぎわ委員会」（栃尾の商店街が中心となった地域活性化に取り組む団体）との共催事業として、公的な補助が受けられるかもしれないとの情報をいただいた。そうして、栃尾の中心市街地活性化の事業として、補助金が活用できる可能性が出てきたことから、その準備のためにも計画づくり・準備作業を急ぐ必要が出てきた。

私たちは話し合いを急いだ。そうして検討すべきポイントとして以下の6つの意見をまとめた。

①企画、内容の詰め

どんな作品が評価されるような基準にするのか。補助金を受ける事業として中心市街の写真に絞る必要が出てきたが、撮影エリアを具体的にどうするのか。受賞作品の賞金はいくらにするのか。応募方法はどうか。

②栃尾高校との連携と活動協力

これまでコロナのために栃尾高校と連携があまりできなかったが、今後は一緒に企画内容を考え、フォトコンテストの PR 活動にも取り組めないか。

③賞金のための協賛金について

賞金には上記の補助金は使用できず、自分たちでお金を集めるしかなさそうである。そのため、栃尾地域内で協賛を募る方法はどうか。

④審査委員の選出、依頼

応募写真の審査員をどうするか。今回のコンテストでは、写真家のプロというよりは栃尾に詳しく、栃尾の活性化を願うという趣旨を理解頂ける方に審査をお願いするのが良いのではないかという意見が出ていた。それとは別にネット投票もありえるのではないか。

⑤チラシ作成の依頼、印刷後の配布

アドバイザー大竹様から、広報用のチラシを作成していただけるとのお言葉をいただいた。広報活動ではそのチラシを活用しなければならない。具体的にどんな施設に配るか、配る範囲はどうか、何部印刷してもらうか。

⑥PR用のホームページ、SNSを活用した広報活動

広報活動のアイテムにチラシだけは弱い。自作でホームページの作成、Instagram や Twitter を利用し、多くの人の目に留まるような投稿をする必要がないか。

8月以降の活動では、以上の6つのポイントを詰めていくことが課題になった。

(執筆担当) 阿部 宏輝

3.2 フォトコンテストの概要の詰め

3.2.1 栃尾商工会での打ち合わせ

8月17日に栃尾商工会へゼミ生6名で訪問させていただいた。フォトコンテストの実施についてアドバイス頂くとともに、ご協力をお願いするためである。事務局長の武士俣様、経営支援室の田巻様と打ち合わせをさせていただくことができた。フォトコンテストの実施に関して、さまざまなアドバイスをいただいた。

先述のとおりフォトコンテスト入賞者の賞金原資の調達には協賛金集めによらざるをえない。その点に関して、地域の商店街の代表者に開催趣旨を説明しながらご協力をお願いしてみてもどうかというご提案をいただいた。ただし、現在コロナ禍で、多くの事業者は収入源に困っておられる状況なので、簡単に協力してもらえないとは思われない。しかし、大学生のみなさんの熱意があれば集まる可能性はある。あくまで皆さん主導でご協力依頼をするのが良い、とお話し下さった。その助言に従い、私たちはその方向で活動することにした。

〔図表6〕商工会での打ち合わせの様子



さらに、ウェブサイトを最大限に活用すること、本フォトコンの趣旨から写真のプロの方だけでなくできる限りアマチュアの方々にも応募頂けるように作品募集をすること、賞を複数用意して応募モチベーションを高めること、などの具体的な助言も頂けた。

そもそも、私たちにはフォトコンテスト運営に関するノウハウが無く、準備の進め方がまったくわからない状態であった。それに対して、武士俣様と田巻様から、かつて栃尾の人気イベント「トチオノアカリ」の一環としてもフォトコンテストが行なわれたことがあり、その関係の方々に話を聞いてみてはどうかとアドバイスいただいた。武士俣様にトチオノアカリのPRに携わっておられる長岡市栃尾支所商工観光課の方を紹介していただくことができた。そうして、8月20日に栃尾支所商工観光課に伺わせていただくことになった。

3.2.2 栃尾支所商工観光課の訪問

8月20日に栃尾支所商工観光課へゼミ生3名で訪問し、荒木様と山内様にお話を聞くことができた。商工観光課はトチオノアカリ協議会と連携されてはいるが、イベントのPRと備品提供が主であり、トチオノアカリで行なわれたフォトコンテストの運営そのものには関わっておられず、詳細な情報はいただけなかった。

しかし、それとは別に栃尾観光協会で2015年に西谷地域フォトコンテストが開催されたという情報を頂いた。西谷地域は棚田や南部神社（別名猫又権現）の狛犬ならぬ狛猫が有名な地域である。当時、商工観光課はそのフォトコン実施の支援をされており、そのときの参加者募集チラシをいただいた。これは後の私たちの活動で大いに参考になる情報だった。参考までに、その時のフォトコンテスト入賞者への賞品は西谷地域の新米だったそう。西谷地域のお米は、お米好きの人たちから魚沼産コシヒカリよりもおいしいと言われている評判の良いお米である。

さらには、4、5年前に中越高校写真部顧問の先生の主導により、長岡市内の各高校の写真部が栃尾に集結し撮影会が行われたというお話もお聞かせ下さった。その撮影会では、早朝に栃尾内の集合場所に集まり、その後思い思いの場所で栃尾地区の写真を撮る会だったとのことである。また、昨年には、旧刈谷田川ニューホテルを撮影会場にしたコスプレ撮影会が実施されたという情報もいただいた。

〔図表7〕 栃尾支所訪問



3.2.3 フォトコン応募要領、広報などの検討

既にも書いたとおり、私たちのフォトコンは「とちおにぎわい委員会」との共催事業として、長岡市地域振興戦略部による中心市街地活性化事業の補助金を申請することになっていた。その申請内容の確認およびフォトコンの広報の進め方などについて、8月22日に、アドバイザー大竹様のデザイン事務所オフィスで打ち合わせを行った。

そこで、フォトコンの応募要領の一つとして、商店街活性化策のイベントという観点から、中心市街地の雁木通りエリア内での撮影を条件とすること、募集期間を10月1日

から10月末まで、写真の応募点数は1人3点まででメールでの応募とすること、一般の部と高校生の部の2部門に分けること、などの項目を決定した。

その後、ゼミ授業において、応募方法がメールになることから作品応募のためのメールアドレスをGメールで作成し、ゼミメンバーでアドレスとパスワードを共有し、全員で管理できるようにした。

また、市の補助金は賞金に利用することができず、大学の補助もギャラリー展示に必要な経費（写真を飾るパネルや、展示会場代など）などにしか活用できない。賞金のための資金を協賛金として自分たちの足で集めなければいけないことを確認した。

栃尾高校との共同活動については、市内の他の高校生や栃尾高校写真部のみなさんへのPR活動などを協働できれば良いと考え、次の共同授業で相談することにした。

さらに、フォトコンテスト開催をたくさんの人に知ってもらうために、チラシの作成が決まっていたが、チラシを配る場所は検討が必要だった。多くの人の目にとまる場所（長岡駅、長岡駅周辺、道の駅など）にチラシを置いてもらえるようお願いをしに行くことを決め、具体的な訪問先や担当者について議論した。

チラシ作成については、その前に今回のフォトコンのコンセプトや応募要領等の全体的イメージを示した資料を作って下さった。その文書を以下に示す（〔図表8〕参照）。

審査員に関しては、ネットによる一般投票という案や、私たち大学生と栃尾高校生で決めるという意見もあったが、組織投票の予防やある程度の専門性が必要ではないかとのアドバイスをいただき、栃尾地区ご出身の長岡技術科学大学大学院教授の山口先生、長岡市栃尾支所の今井支所長、とちおにぎわい委員会の広野代表、長岡大学学長の村山先生、の4名をお願いすることにした。

さらに、審査終了後には応募していただいた全写真を空き家改修ギャラリー「白昼堂」で展示させていただくことにした。

共催組織であるとちおにぎわい委員会の広野様とも話し合い、共催するうえで地元の商店街の皆様との協力体制などについてもご相談した。その一環として、フォトコン開催期間中に地域外から写真を撮りに来てくれた人に、商店街の皆さんがおすすめのスポットをアドバイスするコンシェルジュのような役割ができれば、という案も出た。

3.2.4 8月の活動振り返り

大学では例年8月に入って前期末テストがあり、テスト後は夏休みである。しかし今年度は、新型コロナウイルスの影響で学年暦がずれ込み、夏休みは9月からになってしまった。そのため、8月は授業期間中のため、授業時間外でメンバー全員が集まることがなかなかできなかった。授業がない人だけが時折集まるしかなかった。

そうした中でも、メンバー間での情報共有を心がけ、打ち合わせやフィールドワークに参加できなかったメンバーも進捗状況などを知ることができて良かったと思う。来年度も、ゼミ生全体で情報共有が常にできるように、フィールドワーク参加者は訪問先でメモを取るなど記録に残して共有する体制を心掛けたい。

〔図表 8〕 栃尾中心市街地フォトコンテストの企画（仮）

栃尾中心市街地フォトコンテスト（仮題）概要

開催／栃尾にぎわい委員会・長岡大学 共同主催

協力／新潟県立栃尾高等学校

コンセプト

後の時代において本当に価値ある写真とはどのような写真であろうか。

「映え」が横行するこの時代において、古民家の整理などで発見される昔の写真がどれほど魅力的に感じた事か。価値ある写真とは、作られた綺麗なだけの写真ではなく、時間の死体たる、生活のワンシーンを切り取った生の姿である。

感染症対策が叫ばれ、過疎の町に訪れる人はさらに減り、町は活気を失いつつある。

ここに至り、地域の中心たるこの歴史ある市街地に、改めて人々の目を集め、地域内外様々な人々の視点を写真に収めて眺めることで、過去を温め、新たな価値をも見出したい。



100年ほど前の神明橋にて

昭和中期の町中央公園前の通り



事業内容

上記の思いから、フォトコンテストを開催する。

古くからある城下の雁木通りと、近代に入り開拓され人々が住んだ市街地を対象エリアとし、撮影された写真作品を募集する。

総延長全国三位の長さの雁木通りをはじめ、豪雪地帯ならではの家の作り、入り組んだ路地裏など、ひなびた町ならではの魅力ある写真を遺す事。

フォトコンテストの開催により、撮影者が市街地を散策する事で、少しでも町のにぎわいに寄与する。

にぎわい委員会に所属する商店主にフォトスポットコンシェルジュになってもらい、撮影に訪れた人々が情報収集に商店を訪れるよう誘導する。

高校生の部、一般の部とコンテストを分ける事で、若年層の参加を促し、参加した若年層が、10年後、20年後に改めて町を懐かしむ「宝」を与える。

応募された作品は、撮影場所事に分類し、ウェブ上でのバーチャルツアーのコンテンツとする。

ウェブ上での展示会と同時に、市街地でも数カ所に展示し、撮影場所をめぐるきっかけ作りを行う。

審査員（希望）

長岡市市長もしくは副市長

長岡大学学長

長岡造形大学の教授どなたか

長岡市で写真活動をしているクリエイターどなたか

ピープルズチョイスは不正や忖度の恐れがあるのでしない。

また、コロナの影響は夏のフィールドワークでも感じられた。学外で訪問させていただく時は、必ずマスクを付けなければならない。30度を超える日もあり、とにかく暑い。その状況でマスクを着けた外での活動は灼熱地獄であった。

すでに書いたとおり、8月中のさまざまな活動で、フォトコンテストのエリア設定、メールでの応募の取り扱い、一般の部と高校生の部の2部門の設定、入賞者の賞金関連の決

定など基礎部分が確定できた。みんなの中で、「フォトコンテストをやるぞ！」という感覚がいよいよ高まり、動き出すことができたのはとても良かったと思う。

また、栃尾商工会や長岡市栃尾支所の方々が、大変参考になる貴重な情報を提供してくださったことは、とてもありがたかった。栃尾をもっと活性化したいという、皆さんの栃尾への愛を感じることができた。

筆者（小林）自身も栃尾に 21 年間住んでいるが、栃尾地域で年々人口が減少しているのを実感し、中心市街地の店舗が次第に無くなりつつある状態を目の当たりにしている。栃尾に人が戻ってきてくれるように頑張りたいと、あらためて感じる。栃尾には電車が通っておらず、バスも 1、2 時間に 1 本で、車がなければとても不便な場所だ。その厳しい現状下であって、栃尾に住もう、栃尾に観光に行こうと思ってもらえるような何かを私たちは創り出さねばならない。今年度、その第一歩として、私たちはフォトコンテストを開催することになったが、フォトコンテストが終わった後こそ重要だと考える。フォトコンをにぎわいづくりにいかにつなぐか、集まった写真をどのように活用すれば栃尾地域の活性化につなげていけるのかが来年度以降も課題であり続ける。そうしたことを考えながら、フォトコンの準備に取り組んだ。

（執筆担当）小林 真由香

3.2.5 栃尾にぎわい委員会との会議

9 月上旬、栃尾商工会で開催されたとちおにぎわい委員会の会合に参加させてもらった。代表の広野様以外のメンバーの方との顔合わせはこれが初である。会議では、共催事業であるフォトコンに関して、主に以下の 3 点について説明とお願いをさせていただいた。

- ・栃尾市街地フォトコンテストを行う趣旨・概要の説明
- ・フォトコンテスト開催時期のコンシェルジュのお願い
- ・協賛のお願い

会議には各商店街の代表者様、企業の代表者様も参加されていたため、活動を成功させ地域の活性化に貢献したい旨を強くお伝えして協賛金のお願いをした。私たちにとって、この会議が協賛金集めの先駆けになった。

3.2.6 栃尾高校生との共同授業

9 月には、栃尾高校に出向いて栃尾高校のみなさんとの共同授業を行った。7 月までは ZOOM での情報交換だったが、高校で 4 回の共同授業を行うことができた。その共同授業では、主にフォトコンテストの詳細を話し合った。高校生のみなさんは以下のような意見を出してくれた。

(1) タイトル、コンセプトについて

- ・仮のタイトルにある栃尾中心市街地はどここの範囲を示しているのかがわかりにくい。
- ・全般的な雰囲気で「雁木」という言葉が強調されすぎている。写真を撮る人が雁木ばかりを撮って、集まる写真の雰囲気が偏ってしまうことにならないか。

(2)賞金について

- ・より若い人にも応募してもらうには、「高校生部門」という括りではなくて、「高校生以下部門」という括りにしたほうが良い。
- ・入賞できる確率を高くすることで高校生の応募のモチベーションは高まる。なるべく賞の数を増やした方が良い。賞金は図書カードでは魅力がない。現金の方が良い。

(3)応募方法について

- ・高校生はメールを使わないので、郵送での応募も受け付けるようにすべき。インターネットを利用しない人のためにも、応募方法をメールに限定するのは良くない。

(4)PR 方法について

- ・チラシだけの PR は弱い。高校側で PR 用のポスターを作って、それを人々の目に付く場所に貼ってもらったらどうか。
- ・栃尾地域外の高校生への PR にむけて、市内の他高校の写真部のつながりを活用して PR ができると思う。

(5)その他

- ・栃尾は交通の便が悪く、域外から高校生以下の人に撮影しに来てもらうには、賞金だけでは弱い。何か参加の特典があれば応募数が増えるのではないか。

以上のように、共同授業では高校生ならではの発想で私たち大学生だけでは思いつかなかった提案をしてもらえた、さらに、高校生のみなさんにポスターの作成と参加賞のオリジナルグッズの制作をお願いできることになり、とても有意義な話し合いだった。

〔図表 9〕 高校生との共同授業の様子



〔図表 10〕 栃尾高校前の集合写真



3.2.7 特設ホームページ、Instagram アカウントの作成

私たちは、フォトコンテストのPR法の1つとして、特設ホームページとInstagramのアカウントを作成した。

Instagramでは、特に応募期間中にできるだけ更新頻度をたかめるように心掛けた。友人に呼び掛けたり、ハッシュタグを活用したりして、Instagramアカウントの存在をPRした。その結果、コメントによりフォトコンテストの詳細を聞いてくださる方々も出てきた。InstagramでのPR効果はある程度あったと思う。

〔図表 11〕 InstagramQRコード



〔図表 12〕 Instagram アカウント



〔図表 13〕 特設ホームページ



特設ホームページは、無料でホームページの作成ができるサイト「WIX」を利用して作成した。ゼミ生にホームページを作成できる知識を持つ人はいなかったため、独学でホームページを作成した。余計な広告がつかないように、最終的には有料でドメインの取得も行った。

このホームページではフォトコンテストの詳細を説明し、フォトコンテストの対象エリアの地図も載せた。さらに、応募書類のダウンロードやメール応募ができるようにフォームを置くなどの整備をした。以降、ホームページと Instagram は応募終了後の結果発表などにも利用した。

- ・ 特設ホームページ <https://www.tochophotocon2020.com>
- ・ Instagram [tochiophotocontest2020](https://www.instagram.com/tochiophotocontest2020)

3.2.8 フォトコンテスト開催要領の詰め

9月下旬頃には、フォトコンテストの内容の詳細をさらに固めた。上記の高校生の意見や、にぎわい委員会、商工会の方との相談結果も踏まえて、以下のように内容が固まってきた。

当初案でコンテストのタイトルに「雁木通り」という言葉を入れていたが、先入観で応募作品のイメージが固定化されてしまう可能性があったので、「雁木通り」という言葉は外して、「栃尾市街地フォトコンテスト」という名称に変更した。

賞金金額は「一般の部」と「高校生以下の部」に分けて、それぞれに賞を設定して賞金を定めた。高校生の意見を尊重し、なるべく多くの人に参加してほしいという思いから、高校生以下部門の入賞数を増やした。その結果、下表のとおり賞を設定した（〔図表 14〕〔図表 15〕参照）。

当初、応募期間は 10 月 1 日から 10 月末までを予定していたが、準備が間に合わず、10/15～11/15 の 1 か月間に変更した。応募方法については、メール応募だけでなく、郵送応募も受け付けることにした。

〔図表 14〕 一般部門の賞金設定

賞	金額	作品数
グランプリ	三万円	1作品
準グランプリ	一万円	1作品
入賞	二千元	10作品

〔図表 15〕 高校生以下部門の賞金設定

賞	金額	作品数
グランプリ	一万円	1作品
準グランプリ	五千円	1作品
入賞	千円	25作品

さらに、フォトコンテストの対象エリアを示したマップがないとわかりにくいという意見もあったため、対象エリアのマップを作成し、ホームページとチラシに掲載することにした。またフォトコンテストの参加特典として、高校生が作成してくれた限定商品をとちパルで数量限定で配ることにした（〔図表 16〕を参照）。

〔図表 16〕 栃尾市街地フォトコンテストの参加賞



以上の内容を決定し、チラシ原稿の完成、ホームページへの掲載を急いだ。これらの準備が遅れるとPRのための時間が短くなるので、急ピッチで作業を進めることにした。そうして、10月は主にフォトコンテストの広報活動や、協賛金集めに重点を置いて、活動を進めることにした。

（執筆担当）松永 優芽

3.3 最終打ち合わせと協賛の依頼活動の本格化

3.3.1 フォトコンテスト応募作品への対応策、今後の運営方針について

10月1日に、再度アドバイザー大竹様のオフィスで打ち合わせをした。そこでは、フォトコンテストの実施要領や準備作業等の詳細について、以下のとおり話し合った。その内容に従って、今後の活動を進めることにした。今回のフォトコンでは500作品の応募作品を目指して、広報に取り組むことにした。

(1) 応募作品を受け付けた後の作業について

応募作品の受付期間は10/15（木）～11/16（月）（必着）と1日伸ばす。11/15が日

曜日だったためである。

受賞作品は後日ビッグサイズで印刷して展示する。そのため、Eメールでの応募で小データの写真を送ってこられた場合には、フルサイズのデータを送り返してもらわなければならない点に注意する。A4判でも印刷が難しいような極端な小データ作品は「選外」と判断することでも良い。ただし、そのデータサイズの基準が必要になる。

Eメールでの応募作品は、後日展示することも踏まえて受付次第すべてプリンタでA4判で「きれい」モードにより印刷する。印刷用紙は半光沢紙が良い。印刷後はすぐにハレパネに貼り付ける作業を進める。加えて、審査員による審査手続きのために、写真データをウェブサイトへアップする作業も同時に進める。

(2) 応募作員の展示関連

展示会では、一般部門、高校生以下部門とも、グランプリ作品はA0判サイズ、準グランプリ作品はA1かA2サイズ、入選作品はA3判サイズ、選外はA4判サイズで展示する。

A0判の印刷は外注する必要がある。それ以外は大学の1号館3Fの地域連携研究センター内の2台のプリンタが利用可能だが、その確認が必要である。

大学のプリンタでの印刷に必要なインクカートリッジ(10セット分程度)、ハレパネ、印刷用紙などの消耗品は、「とちおにぎわい委員会」宛での領収証で購入し、補助金で負担していただく。予算額を固めるために、その金額が分かり次第大竹様に連絡する。これらは、タイトなスケジュールで作業を前倒しで進めるためにも、早めに購入しておく必要がある。

(3) 展示会のスケジュール、審査方法に関して

12月以降に応募作品の展示会を実施する。展示場所は、①「ギャラリー白昼堂堂」(グランプリ作品を含めた展示)と②「とちパル」展示スペース(準グランプリ作品を含めた展示)の2箇所を検討する。

展示会の開催時期は、12/6(日)から2週間程度が理想である。12/5のホテルニューオータニ長岡での地域活性化の成果発表会において来場者に展示会開催のPRをして、間を空けずに翌日から開催できれば、より多くの人の来場が期待できる。そのためには12/5までに展示会場での展示作業を済ませ、その会場の様子の映像を発表内容に含めた上で、翌日からの開催をPRできないか。

受賞作品の審査方法については、全応募作品をA4判で印刷して、それらを大学の一箇所に並べて、そこに審査員に来てもらう。その日程は早めに設定して、審査員に予定しておいてもらう必要がある。

あわせて、ウェブにアルバムとして全応募作品を掲載し、ウェブ閲覧で審査できるようにもしておく。応募作品のデータのファイル名を、受け付け時に応募者名+ナンバリングでre-nameしておく。それを随時まとめて、審査員閲覧用ウェブサイトへアップする。審査員には、応募締め切り前にも随時閲覧をお願いし、11/20頃までには審査結果を連絡してもらうようお願いしておく。

以上の審査手順を前提に逆算すると、11/16（応募締め切り日）～11/20 頃までの間に、全応募作品のデータの整理と審査用ウェブへの掲示、プリントアウトとハレパネへの貼り付けを完了しておかなければならない。特に、応募締め切り日（11/16）近辺に応募が殺到すると予想される点は考慮しておく必要がある。この期間には相当多忙になるため、それを踏まえて段取りを組んでおく必要がある。班のメンバーの役割分担の調整が可能かどうか、またメンバーの作業手順と分担について周知を徹底しておく必要がある。

(4) フォトコン関連のその他

審査基準としては、栃尾のまちなかにおける現実の写真を評価すべきで、モデルを呼ぶなど綺麗に映るような様々なセッティングをしたような写真は評価されるべきではない。実際に、トチオノアカリのフォトコンではそうした応募写真が多いとのことである。この基準関連の主旨は、審査員に直接お伝えしておくべきである。

3.3.2 新潟日報での掲載

10月6日にも栃尾高校にて共同授業を実施した。この日は、事前に栃尾高校の先生が新潟日報様へお声がけくださったおかげで、授業中に取材を受けることができた。フォトコンテストの概要や賞金、チラシ、特設ウェブサイト、ポスターなどの紹介をしていただき、10月14日の新潟日報の長岡地域の紙面に掲載された（〔図表17〕参照）。

このフォトコンテストでは、地域の方だけではなく、地域外からも栃尾に来ていただき新しい魅力を発見してほしいこと、栃尾という地域に触れ合ってもらいたいという狙いがあることを記者の方にお伝えした。掲載された記事は、本コンテストのPRに大きく貢献した。新聞掲載後には柏崎市、上越市、三条市など地域外からも問い合わせの連絡が来るようになり、マスメディアはPRにとってとても重要だと実感した。

〔図表17〕10月14日（水）新潟日報（朝刊）掲載記事より



3.3.3 PR用のチラシ完成

10月半ば頃にPRのためのチラシが完成した（〔図表18〕〔図表19〕を参照）。これには、フォトコンテストの趣旨、注意事項、対象エリアマップ等を記載していた。デザインは、アドバイザー大竹様が行なってくださった。7千部印刷した。

〔図表18〕 フォトコンテスト チラシ（表）

**栃尾市街地
フォトコンテスト**

栃尾のまちなかの風景の魅力・価値を表現した写真を募集します

【募集期間】 令和2年10月15日～11月16日

テーマ（審査基準）

1. 栃尾の中心市街地（裏面の地図で示された範囲）で撮影した写真
2. 風景、人物問わず、参加した人々が後世まで伝えたい写真
10年後、20年後にあらためて懐かしむことができる「宝」といえる写真

賞について

一般部門		高校生以下部門	
グランプリ	（1点） 賞金3万円	グランプリ	（1点） 賞金1万円
準グランプリ	（1点） 賞金1万円	準グランプリ	（1点） 賞金5千円
入賞	（10点） 賞金2千円	入賞	（25点） 賞金1千円

審査員 とちおにぎわい委員会 / 長岡市栃尾支所長
長岡技科大 山口教授（環境・建設系）/長岡大学学長

結果発表 11月下旬にメールまたは電話にて通知いたします。

作品展示 ガラリー白昼堂堂、とちパルにて入賞作品を展示予定
（展示期間は決定後通知）

お問合せ 長岡大学石川ゼミナール研究室
TEL:0258-39-1907 / E-MAIL: tochiophotocon2020@gmail.com
※お電話でのお問い合わせは平日午前10時～午後4時。業務上電話に出れない場合がございます。
メールでのお問い合わせをお勧めいたします。

栃尾市街地フォトコンテスト特設ページ
<https://www.tochophotocon2020.com>

Instagram
@tochiophotocontest2020

共催：とちおにぎわい委員会・長岡大学 協力：新潟県立栃尾高等学校

〔図表 19〕 フォトコンテスト チラシ (裏)

栃尾市街地 フォトコンテスト

栃尾のまちなかの風景の魅力・価値を表現した写真を募集します
【募集期間】 令和2年10月15日～11月16日

◆コンセプト・概要

栃尾地域(新潟県長岡市)のまちなかの魅力発見と今後の発展に向けた価値創出を目指したフォトコンテストです。地域の人々の生活、文化、経済をこれまで支えてきたまちなか。そこには今どんな情景が広がっているのでしょうか。後世に残すべきその情景はどのようなのでしょうか。栃尾を舞台としたこのフォトコンテストを通して、地方のまちなかの魅力を発掘し、新たな資産として地域の活性化についでいきたい。そして地域活性化に貢献したい。その実現に向けて、このフォトコンテストが一つのパイロット事業になればと考えています。

◆応募要項

- 応募資格 趣旨賛同者(年齢・国籍・プロ・アマチュア問いません)
- 応募締切 令和2年10月15日～11月16日 17:00まで(郵送の場合は当日必着)
- 応募方法
1. メール送信……規格容量: 10MB 以内、データ形式: JPEG のみ
必ず下記「記載内容」をメール本文に明記してください。
 2. 郵送(プリント)……プリントサイズ: L サイズ～2L サイズ(インクジェット可)
必ず下記「記載内容」を明記した用紙を写真に同封してください。

- 記載内容
- a) 名前 b) 年齢 c) 応募者住所 d) 電話番号 e) タイトル f) 撮影日
 - g) 撮影場所(町名・番地等わかる範囲で結構です。)

問い合わせ先
長岡大学 石川ゼミナール研究室 〒940-0828 新潟県長岡市御山町 80-8
TEL: 0258-39-1907
E-MAIL: tochiophotocon2020@gmail.com

- 作品決定 応募者本人が撮影し、著作権を有する作品(一人3点まで)
- ・令和2年10月15日～11月16日に撮影した写真。
 - ・他コンペで入選していないこと。
 - ・カラー、モノクロ、縦横問いません。
 - ・応募作品は単写真に限ります。
 - ・トリミング以外の画像加工したものは審査対象外です。

◆注意事項

- ・応募作品は以下の地図に記載されている「撮影エリア」内に撮影されたものに限りです。
- ・応募で提供されたメールアドレス、名前・住所等の個人情報は、本コンテスト関連の業務以外で一切使用いたしません。
- ・個人や個人所有物が特定できる作品を応募する場合、必ず本人・所有者の承諾を得てください。
- ・第三者から権利侵害の苦情等があった場合、すべて応募者が対処するものとし、当方は一切の責任を負いません。
- ・応募作品は栃尾地区の観光活動に使用させていただきます。その際に、著作に対する報酬は発生しない事を予めご了承ください。(直接金銭的な利益になる事業には使用しません。)
- ・応募作品は(写真プリント)は返却しませんのでご了承ください。

◆撮影エリア ～栃尾地区の中心市街地～

以下の地区内で撮影された写真が応募対象です



募集期間中
「とちパル」にて
栃尾高校生制作の
オリジナルグッズを
先着40名様に
差し上げます。

※「フォトコンテストの参加者です」と店内スタッフにお伝えください。

チラシ配りの活動は10月上旬に本格化させた。栃尾地域、長岡市内各地域の公共施設や商業施設を中心に置いていただくように依頼をした。最終的にはコンテストが既に開始された状態でのPR活動になってしまったが、メンバー全員により急ピッチでチラシを配った。11月上旬頃までは、出かけることが可能なメンバーで配布の活動を続けた。

SNSによるPR活動も開始した。特設ウェブサイトとInstagramでの広報活動を本格化した。Instagramでは開催PRだけでなく、地域イベントの開催情報も投稿して、少しでも多くの人が栃尾地区に興味を持ち、撮影に栃尾を訪れてくれるよう投稿した。

3.3.4 協賛金の依頼活動

チラシ配りと並行して、入賞作品に充てる賞金を集めるための協賛金を募る活動も進めた。協賛金は一口3千円に設定し、賞金総額である10万円を目標金額とした。栃尾地域の各商店街の店舗を中心に訪問することにした。ゼミ生自作の名刺を作成し、領収書、協賛依頼状も用意しそれらを持って回った（〔図表20〕参照）。

〔図表20〕協賛金依頼状

令和2年10月20日
各位
長岡大学石川ゼミナール
栃尾フォトコンテスト2020への協賛金のお願い
拝啓 時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。平素は栃尾地区の地域活性化に向けたゼミナール活動につきまして、格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。
私たち長岡大学石川ゼミナールの学生一同は、昨年以来栃尾地区の活性化に向けたPR活動に取り組んで参りました。その活動の一環として、このたび、令和2年10月1日より、とちおにぎわい委員会との共催により、栃尾地区中心市街地を対象としたフォトコンテストを開催いたします。このコンテストでは、栃尾の魅力創出、新発見を目指し、地域の人々に加え、地域外の多くの方が、撮影のために栃尾の市街地に訪れることで、栃尾のPRにつなげていきたいと考えています。フォトコンテストの実施要領等の詳細は、別紙をご覧ください。
つきましては、誠に恐縮ではございますが、栃尾フォトコンテストの趣旨をご理解いただき、ご協賛を賜りたく、ここにお願いを申し上げる次第でございます。
なお、ご協賛の内容につきましては、下記のとおりです。なにとぞよろしく御願申し上げます。
敬具
記
1. 協賛金額 一口三千円（何口でも構いません） 協賛いただいた皆様のお名前（事業者名・店舗名等）を、応募作品展示会（12月以降に各会場で開催予定）案内・PRのチラシ、特設ウェブサイトに掲載いたします。
2. 募集期間 令和2年11月31日（土）まで
3. 納入方法 現金払い（その他のお支払いを希望の方は別途ご相談ください）
4. お問い合わせ先 長岡大学石川ゼミナール研究室 担当 : 4年 野澤 幸紀、大野 航 担当教授：石川 英樹 TEL : 0258-39-1907 〒 : 940-0828 新潟県長岡市御山町80-8 Mail : tochiophotocon2020@gmail.com

まずは、栃尾商工会から協賛金をいただきました。同時に、各商店街の代表者名簿をいただき、その挨拶回りも始めた。断られる不安は大きかったが、実際には地域の方々が快く活動に賛同してくださり、全体的にスムーズに話を進めることができた。各商店街様、個人事業主様から協賛金を提供いただくことができた。

さらに、商工会に紹介いただき、栃尾ライオンズクラブとロータリークラブの各例会でフォトコンテストのPRと協賛のお願いをさせていただけることになった。ともに大きい組織であるため、協賛を得られる可能性は十分あるとお話だった。会員の方々に個別に協賛のお願いをするのではなく、会合で大勢の方々に対するスピーチによるお願いである。これまで経験したことのない緊張感のもとで臨まなければならなかった。私たちの栃尾の地域活性化に対する熱意と、活動を成功させたいという強い思いを伝えようと、準備と工夫をしてスピーチに臨んだ。そうして、このお願いが実を結び、二つの団体の両方から協賛をいただける運びとなった。

以上の、店舗や会合などを訪問して協賛金をお願いする活動は、私たちにとって初めての経験だった。なかでも、ロータリークラブやライオンズクラブの例会に出席させていただいた経験は、とても貴重なものだった。そうした結果、栃尾地域各商店街、ロータリークラブ様、ライオンズクラブ様を始め、多くの方々に協賛いただき、当初の目標金額10万円をほぼ達成することができた。

今回、フォトコンテストに協賛くださったのは、以下の方々である。

栃尾ライオンズクラブ様	栃尾ロータリークラブ様	谷内商店街一同様
旭町商店街一同様	栃尾観光協会様	栃尾商工会様
とちパル食堂部様	コバヤシオートサービス様	株式会社山甲様
デザイン事務所オオタケコウスケ様		

(執筆担当) 布川 海渡

3.4 応募作品の受付からフォトコンテスト結果発表まで

3.4.1 応募作品の管理体制

10月15日(木)から応募期間に入ったが、応募期間の中間頃までは作品の応募がなかった。しかし11月4日に最初の作品が届いてからは、徐々に応募作品が増えていった。

11月3日のゼミ授業時には、Eメールや郵送での応募作品受付の手順と見落とし防止の段取りなど、あらためてみんなでの管理体制を確認した。

Eメールでの受付の方法としては以下の流れで対応することにした。

- ①応募メールに対して受付完了の返信メールを送信
- ②受付完了したメールを担当教員へ転送
- ③大学のGoogleドライブ内の「フォトコンテスト2020作品応募」フォルダに格納

郵送応募については大学の石川研究室まで届くことになっている。こちらに対しては、以下の手順を定めた。

- ①送られてきた各写真を大学でスキャンしてデジタル化する。
- ②デジタル化した写真ファイルをメールの時と同様にGoogleドライブにアップロードする。

③Google ドライブのフォルダ内は「一般部門」と「高校生以下部門」の二つに分けて、応募日が早い作品から番号をつけていつでも閲覧し確認できるようにする。

そうして、ゼミの授業時に、以上の①～③の作業を曜日ごとに分担し、日付が変わると同時にその日の作品応募数をグループ内の LINE で報告する体制を整えた。

〔図表21〕 授業時間中の活動でハレパネに写真を貼る作業



また、後日の応募作品展示会では、全応募作品の展示を予定していた。そのため、全作品のプリントアウトとハレパネに貼り付ける作業も同時に進めていかなければならなかった。

この作業は、審査のためにも必要な作業だった。班のメンバーには、写真をハレパネに貼る作業の経験者はいなかった。そのため、ともに手順を理解して作業できるように、授業時に全員でハレパネ貼りの作業を行った。

ただし、授業時間内ではどうしても終わらないため、お昼休みや授業の空き時間などを利用して全員で協力して作業を進めようと考えた。しかし、その分担はうまくいかず、作業量が個人別に偏り、不公平感が生じる結果になった。ここでの反省点としては、作業は全員で行うということを曖昧にせず、はっきりと個人別に時間を決めるなどして分担を明確にして、各ゼミ生の仕事量を均等にすべきだったと感じる。

3.4.2 募集締め切りに向けた最後の PR

11月中旬に差し掛かり募集期間は終盤に入ったが、応募件数は伸びなかった。そうして、果たして締め切りまでに審査できるほどの応募がくるのだろうかという不安が大きくなってきた。

そんな中、長岡市大手通庁舎の地域振興戦略部を通して、市内41ヶ所のコミュニティセンターにチラシを配布していただけることになった。私たちは、各コミュニティセンターの名称を調べ、配布部数ごとに付箋をはり、地域振興戦略部の本田様宛てにチラシ配布のお願いに伺った。このおかげで、応募受付期間が残り半分を切ったところで、チラシをまとめて配布することができた。

さらに、締め切り直前にはなったが、11月9日に見附商工会経営支援室の滝沢様にフォトコンテストの PR についてご協力依頼をさせていただくことができた。応募期間の残

りが少ない中でのお願いとなったことから、個別に写真愛好家の方々にお声掛けいただけることになった。並行して、ゼミ生によるチラシ配布も続けた。

募集期間も残りわずかとなった11月10日(火)には、アドバイザーの大竹様から SNS での有料広告を出してみてもどうかという提案をいただいた。残り5日だったが、このままだと目標の500点にはるかに及ばない状況だったため、広告を出す方向で決まった。

これは主に Facebook による広報で、費用が5,000円から10,000円の間でかなりの人数にリーチできる。しかも、エリアや年齢層、趣味などのターゲットを絞って告知できる。その具体的な手順は、大竹様が進めてくださった。SNS の有料の宣伝活動自体、私たちツアー開発班のメンバーにとって新たな学びだった。今後の様々な活動における広報活動の一つとして、私たち自身でも活用できるようになりたいと感じた。

さらに、大竹様からもう一つアドバイスをいただいた。それは、私たち自身による草の根の広報活動である。家族、友人、親戚などを連れて栃尾に写真を撮りに来てもらうように、私たちの周りのできるだけ多くの人々に直接声を掛けるのである。チラシやポスターなどを使った PR 活動が出遅れた分、このフォトコンテストを盛り上げるために自分たちが最後にできることをすべてやらなければならないと実感した。

3.4.3 応募結果

11月16日の締切日を迎えた。応募結果は、一般部門が106点、高校生以下部門が17点という結果だった。

目標である500作品には遠く及ばなかったが、それでも多くの方から作品をお送りいただいた。どれも素晴らしい作品ばかりだと感じた。ゼミ内でも、審査前にどの作品が賞に選ばれるかという予想の話が出ていた。

今回、メールと郵送という2つの方法で応募を受け付けたが、郵送での応募はメール応募より大幅に少なく、高校生以下部門は全員メールでの応募だった。

高校生以下の応募は非常に少なかった。27の受賞作品数を用意していたのに対して、大きく下回る応募数だった。栃尾高校との共同授業では、高校生が応募したくなるような要因がもっと必要だとの意見や、賞の数を増やすべきだという意見も出て、それらを取り入れた設定をしていただいただけに、応募の少なさは非常に残念だった。

この結果を踏まえ、高校生以下部門の賞の扱いをどうするか話し合った。ゼミでは、全応募作品を自動的に受賞作品とした上に賞金を余らせるのはよくないという意見で一致した。様々な方にも相談した結果、高校生以下部門の作品について、審査結果をもとに一定水準以上のみ受賞作品として、その結果余る賞金は、応募数の多かった一般部門に「特別審査賞」を設けてそちらに活用するという提案をいただいた。それに従い、一般部門に「特別審査賞」を設けることに決定した。

3.4.4 審査及び審査時の注意事項

審査では、審査員の方々に二つの方法で審査していただいた。一つは、審査用ウェブサイト（〔図表 22〕参照）による審査である。同ウェブサイトにはアップロードした写真をみていただいて Google フォームのアンケート機能（〔図表 23〕参照）を利用して採点し

ていただく。二つ目は、ハレパネに貼った写真を実際に見ていただいて、採点していただく方法である。

その準備のために、前述したようにA4判サイズにプリントアウトした写真をハレパネに貼る作業と同時に、審査用ウェブサイトの作成も進めた。大学 Google ドライブ内の写真と審査用サイトとでチェックして、漏れがないようにみんなで確認した。

11月24日のゼミ授業では、それまでにハレパネに貼る作業と審査用ウェブサイトへの写真アップロードが何とか終わっていたため、審査の点数の付け方について確認した。審査員による点数の付け方として、以下の通り5段階で評価をしていただくことに決まった。

- | | | |
|------------|------------|-------|
| 1点 劣っている | 2点 やや劣っている | 3点 普通 |
| 4点 やや優れている | 5点 大変優れている | |

審査員の方々には、以上の5段階評価のお願いと、基準としての以下のポイント、さらに高校生以下の応募が非常に少なく一般部門に特別審査賞を設けた旨も含めてご連絡した。

- ・ 栃尾の中心市街地で撮影されているものか。
- ・ 風景、人物問わず、参加したい人が後世まで伝えたい写真であるか。
- ・ 10年後、20年後にあらためて懐かしむことができる「宝」といえる写真であるか。

〔図表22〕 審査用ウェブサイト



〔図表 23〕 審査用 google フォーム

3.4.5 学内での審査

12月9日には審査員の広野様をお招きし、学内の地域交流ホールで審査を行っていただいた。広野様には、ハレパネに貼られた全応募作品を見て審査していただいた。審査の評点はgoogleフォームで作成したシートを利用して、評価記入に用いた。

〔図表 24〕 12/9(水)学内での審査の様子



3.4.6 結果発表

広野様の審査が終了し、全ての審査員の集計が終わった。4名の審査員の皆様の評点をExcelでまとめ、集計した点数に従って上位から受賞作品を決定した。先述のとおり高校生以下の部門の応募数が予定入賞数を下回った点も踏まえ、以下のように対応した。

- ・高校生以下部門で、審査員がお一人でも最低点である1点をつけた作品、もしくは四人

の合計点が10点に満たない作品は選外とする。

- ・上記の結果、高校生部門に用意していた賞金で余った金額をもとに、応募が多かった一般部門の中から「特別審査賞」2作品を追加で選ぶ。これは準グランプリに次ぐ2作品とする（準グランプリと入選の間）。
- ・特別審査賞の賞金には、高校生以下部門の賞金で余った金額をもとにして、各作品7,500円ずつ賞金を充てる。
- ・最終的な受賞の作品数と賞金総額は以下のとおりである。当初予定していた賞金総額100,000円は全額活用する結果となった。

〔図表 25〕 一般部門

賞	金額	作品数
グランプリ	¥30,000	1作品
準グランプリ	¥10,000	1作品
特別審査賞	¥7,500	2作品
入賞	¥2,000	10作品
	総額 ¥75,000	総数14作品

〔図表 26〕 高校生以下部門

賞	金額	作品数
グランプリ	¥10,000	1作品
準グランプリ	¥5,000	1作品
入賞	¥1,000	10作品
	総額 ¥25,000	総数12作品

共催のとおりにぎわい委員会の方には書状により審査結果をご報告するとともに、審査員の方々にも別途、メールと書状により審査完了の報告を行なった。その後、特設ホームページ、Instagramにて受賞作品を公開した。受賞者にはメールと郵送にてご連絡し、賞金は1月下旬に現金書留でお届けした。さらに、2月中旬にギャラリー白昼堂堂にて全応募作品の展示会を行う。

以下に各部門でグランプリを獲得した写真を掲載する。

〔図表 27〕 一般部門グランプリ受賞：「古き良き宝物」



〔図表 28〕 高校生以下部門グランプリ受賞：「彩り」



(執筆担当) 大野 航

4. 今年度の取り組みについての反省点、来年度以降に向けて

4.1 今年度の成果と反省

今年度の私たちの活動の目標は、フォトコンテスト開催によって栃尾地域の PR につないでいくことになった。まだ栃尾に行ったことがない、栃尾をよく知らない人に、実際に栃尾に足を運んでもらい、または栃尾の写真を見てもらうことで、栃尾の魅力を PR する。写真撮影を通じて、地域外の人に栃尾の新たな魅力を発見して価値を創出してもらう。その活動を土台として、来年度以降のさらなる PR 活動につないでいこうということが、究極の目標だった。

実際にフォトコンに写真を応募された方々のプロフィールを見ると、長岡市外からの応募が少なくなかった。事前の広報へもっと積極的に取り組めていれば、より多くの域外の皆さんから応募してもらえたのではないかと感じる。

今年度を振り返ると、まったくの新事業であるこの「栃尾市街地フォトコンテスト 2020」を、8月の準備開始以降何とかやり遂げたことは大いに評価できると思う。ツアー開発班のメンバー全員が協力し合い、新しくかつ難しい課題にチャレンジして、これまで頑張ってきた結果である。何より、栃尾地域の方々の協力があったからこそやり遂げることができたと感じる。

私たちにとって特に大きな成果は、新たな方々との出会いがたくさんあったことだ。今年度は、昨年度以上に多くの人々と交流する機会を得た。その大きな理由の一つは、フォトコンテスト賞金に充てるための協賛金集め及びコンテスト応募作品募集のチラシ配布などのために、栃尾の商店街や事業所を訪問させていただいたことである。これには、各ゼ

メンバーがフォトコンの企画内容や目標をきちんと理解した上で、さらに社会人としてのビジネスマナーに従って行動する必要があった。まだ学生である私たちにとってハードルは高かったが、4年生を中心に何とか乗り越えることができた。とりわけ、名刺交換や依頼状作成などを学生時代に実戦で経験できたことは、何よりの貴重な体験になったのではないだろうか。

ビジネスマナーに慣れない私たちに対して、訪問させていただいた地域のみなさんは優しく丁寧に対応してくださった。今後私たちがこのような地域活動を続けていくための自信を与えてくださった。

他方で、今年度の活動で反省点が四つある。

一つ目は、企画決定が遅かったことだ。特に新型コロナウイルスの影響により、前期授業がスムーズにスタートできなかった。地域活性化のゼミ活動にとって、ゼミメンバー間の話し合いは非常に重要であるが、それがうまく進められなかった。特に ZOOM で話し合いが非常にやりにくく、その影響もあって取り組み内容が確定する7月まで、ツアーの集客事業に固執する結果となってしまった。今年度の活動ペースを踏まえると、来年度は4～5月にはフィールドワークに行き、4年生が栃尾を案内し、3年生は栃尾を知るというステップを早い段階で行う必要がある。

二つ目は、作業分担が適切にできなかったことだ。今年度は時間もない中、3か月程度の期間でフォトコンテストの開催準備を完了せねばならなかった。8月29日に取り組み項目を整理したあたりから本格的な準備作業が開始された。しかし、9月に入ると大学が夏季休暇に入り、ゼミ活動に参加できる人とできない人の差が生じた。メンバー内でしっかりとした分担の打ち合わせができないまま、企画案を修正しながら作業内容を決めて実施する形で進めざるを得なかった。そのため、作業分担の相談が難しく、一部のゼミ生に負担が集中した。

振り返ると、この夏季休暇中は全メンバーの活動参加を徹底するために、各自が家でもできる作業を段取りし、全員が自分のペースで作業できる作業の割り振りができれば良かったと思う。例えば、フォトコンテストを開催するための基本情報の収集作業は、大学に集まらずともできただろう。他のフォトコンテストとの比較、どんな注意点があるかなどについて、分担作業でもっと時間を使い考えておくべきだった。実際には、準備不足の結果として、募集要項やチラシ内容やスケジュール遅延に対してクレームを受けたり、応募者の写真サイズの検討不足が問題になったりするなど、後から対応しきれない問題発生につながってしまった。

後期授業が開始された10月以降は、時間外活動が必然的に増えた。現地での打ち合わせ、協賛金獲得活動、フォトコン PR 活動などのための栃尾への訪問が主な活動である。本来なら、ゼミ生のスケジュールを調整して公平に分担すべきだったが、フォトコンで応募受付開始が切迫し時間がなかったため、行ける人が行くという流れにならざるをえなかった。そうした流れは11月まで続き、不公平感は相当強まったように思う。しかし、そうした中でも、終盤にプリントアウトした写真をハレパネに貼り付ける作業には、全員が参加できて良かったと感じる。

三つ目は、高校生以下の部門についての広報だ。今年度も栃尾高校とは数回にわたり共同授業を行なうことができ、活動に大いに協力してくださった。ポスター制作や参加賞のオリジナルグッズの制作、さらにフォトコンテストについて高校生ならではの意見もたくさんいただいた。それらの貴重な意見を取り入れて、高校生以下部門の入賞作品点数を一般よりも多く設定し、高校生からもたくさんの応募を期待していた。

しかし、実際の応募数は私たちの予想よりはるかに下回る結果となってしまったのが残念だった。市内の高校間の写真部の連携に期待して、高校生以下部門のPRを高校の皆さんに任せっきりになってしまったことが反省される。また、私たちの活動不足によって、本コンテスト自体のPRや参加賞のオリジナルグッズのPRが不十分で、栃尾高校の皆さんが作成してくれた参加賞のオリジナルグッズを大量に余らせてしまったことも、残念な結果であった。

最後は、とちおにぎわい委員会の皆様との協力体制が不十分だったことだ。本来であれば、もっと打ち合わせを重ねアドバイスをより多くいただくべきであった。とちおにぎわい委員会との協力として、各商店街の事業主の方々にコンシェルジュのような役割を担ってもらおうという素晴らしいご提案を当初いただいたが、詰めの話し合いができず、十分実現できなかった。来年度以降は、もっと地域の方々の声に耳を傾け、そのアドバイスを参考に自分たちができることを一つずつ確実に取り組んでいかねばならない。

(執筆担当) 胡 少峰

4.2 来年度の活動にむけて

今年度は、コロナ感染症の影響もあり、本来目標としていたツアー開発ができなかった。しかし、そのかわりに実現したフォトコンテスト開催により、来年度以降のツアー開発の土台を築けたのではないだろうか。さらには、ツアー以外の新たなプロジェクトにつながりうる活動にもなったと思う。

そうした思いのもとで、ゼミで検討した今後の具体的な取り組みとして2つのアイデアがある。以下で紹介したい。

〔図表 29〕 成果報告会での発表



(1) 栃尾スポットマップの開発

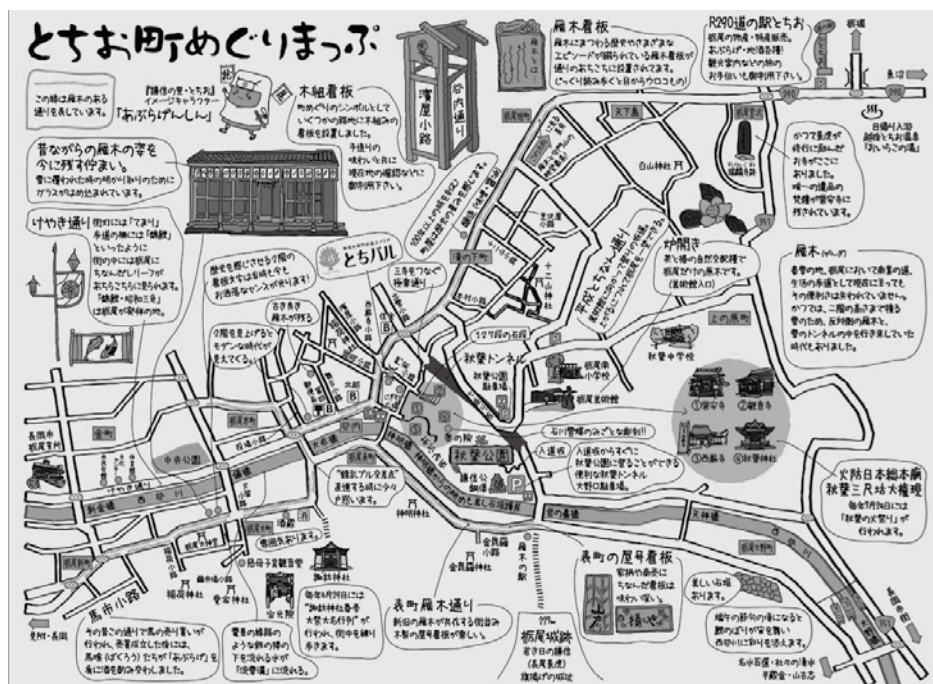
まずは、フォトコンテストの応募作品を活用して、栃尾の魅力を発信できるスポットマップの作成プロジェクトである。この案のヒントになっているのは、「とちお町めぐりまっぷ」と「とちおうまいものめぐりまっぷ」である（〔図表 30〕〔図表 31〕参照）。ともに各種商店や観光スポットを示した栃尾ならではのマップで、各スポットの詳細な説明が記載されている。手書き風のイラストが描かれ、とても味がある。

ただし、これら二つのマップには現地の風景が描かれておらず、実際にどんな光景の場所なのかがわかりにくいと感じられる。

そこで、フォトコンテストで集めた写真を活用して、各スポットに合う写真をマップに載せ、新たな栃尾スポットマップを開発してはどうかと考えたのである。今回の応募作品には、受賞には至らなかったものの栃尾の魅力発信にふさわしい素晴らしい写真が多くあったように思われる。そうした写真を有効に活用していきたいと考えている。

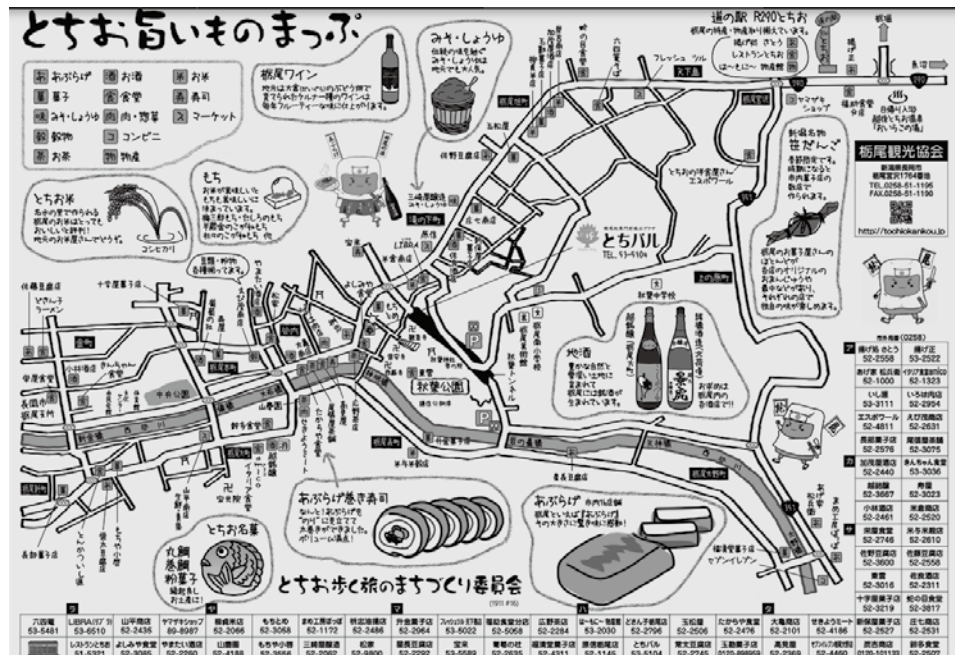
また、手作りマップの他に google マップの手法の利用も可能だろう。クラウド上の電子マップにコンテストで集まった写真を掲載し、地図上でその場所をクリックしたら写真が何枚も出てくるように活用できないだろうか。これは技術的にハードルの高い活動になるかもしれないが、今年度培ったノウハウを使い何とか作成できたらと考えている。

〔図表 30〕 とちお町めぐりまっぷ



(出典) 栃尾観光協会「とちお町めぐりまっぷ」(URL http://tochiokankou.jp/_src/12258/1911%20HP%20machimeguri%2316.pdf) (2021/1/4 閲覧)

〔図表 31〕 とちお旨いものまっぷ



(資料) 「とちお町旨いものまっぷ」、栃尾観光協会ウェブサイト (URLhttp://tochiokan kou.jp/_src/12259/1911%20HP%20umaimono%2316.pdf) (2021/1/4)

(2) フォトアルバムの作成

2つ目の案は、フォトコンテスト応募作品をフォトアルバム化して地域の観光資源の紹介資料を作成するアイデアである。これは、今年度前半の大学閉鎖期間中に提案されたアイデアの一つである。

このフォトアルバムの利点としては、必ずしも栃尾の人が撮った写真である必要がないという点である。今年度のフォトコンでは、多くの地域外の人たちが栃尾を撮影した。地域内の人々のとらえ方とは違った新鮮な栃尾の魅力が表現されている可能性がある。その点は、新たな発見に向けて非常に有効である。

また、今回のフォトコンではプロ、アマチュア問わず、年齢制限もなかったため、幅広い年代の方が応募してくれた。様々な視点から撮られたアルバムを作成できるであろう。新たな観光資源の発見につながるのではないかと考える。

そうして作成したアルバムに関しては、栃尾の観光施設のみならず、地域外の施設に置いてもらい、栃尾の交流人口の増加につながればと考えている。

以上の2つの案はまだ構想段階である。いずれも今年度行なったフォトコンテストで得られた成果の応用である。新型コロナウイルスの一日も早い収束を願うとともに、来年度以降の活動で今年度にはできなかった対外的な活動により、栃尾地区の活性化に一層寄与することができればと考えている。

(執筆担当) 野澤 幸紀

《参考資料》

- 〔1〕 栃尾商工会、「栃尾商工会ホームページ ～謙信の里～」 (URL <http://www.tochisyo-kenshinnosato.jp/blog/kenshinnosato/>) (2021/1/5 閲覧)
- 〔2〕 長岡市栃尾支所商工観光課ウェブサイト (URL <https://www.nihon-kankou.or.jp/niigata/detail/15215aa1020111399>) (2021/1/4 閲覧)
- 〔3〕 栃尾観光協会ウェブサイト (URL <http://tochiokankou.jp/>) (2021/1/5 閲覧)

長岡大学 学生による地域活性化プログラム 各プロジェクト報告書

1. 長岡市撰田屋の魅力を高め、観光客を増やし、地域活性化を図る。
～現状の把握と分析～
生島義英ゼミナール
2. 栃尾地域の PR による活性化：
空き家の再活用による地域振興活動と二十村郷の錦鯉の PR 活動
石川英樹ゼミナール
3. 栃尾地域の PR による活性化：
栃尾繊維業の PR に向けたマスク考案と裂き織りによる商品開発
石川英樹ゼミナール
4. 栃尾地域の PR による活性化：
フォトコンテスト開催による栃尾地区の PR
石川英樹ゼミナール
5. まちの情報発信拠点「まちの駅」の認知度アップに向けて
鯉江康正ゼミナール
6. 十分杯で長岡を盛り上げよう！
－動画で伝えたい 十分杯と長岡の魅力！－
権 五景ゼミナール
7. データエビデンスに基づいた地域をより良くするための提言
～地場産業・観光を中心に～
坂井一貴ゼミナール
8. オープンファクトリーで長岡を活性化！
栗井英大ゼミナール
9. グラスルーツグローバリゼーション
－草の根・地域からの人類一体化の推進－
広田秀樹ゼミナール
10. 商品開発から学ぶ会計と経営
～伝統文化と現代技術の結晶「みどり繭」を巡って～
喬 雪氷ゼミナール

令和2年度 学生による地域活性化プログラム 石川英樹ゼミナール活動報告書

【発行日】 令和3年3月30日

【発行人】 村山 光博

【発行】 長岡大学

〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8

T E L 0258-39-1600 (代)

F A X 0258-33-8792

<https://www.nagaokauniv.ac.jp/>